

わたしの主、わたしの神よ

ヨハネによる福音書 20 : 24 - 29



司祭 ヨハネ 井田 泉

2024年4月7日

復活節第2主日

上野聖ヨハネ教会にて

「十二人の一人でディディモと呼ばれるトマス」ヨハネ 20:24

今日の福音書に登場したこのトマスは、一般にどのようなイメージが持たれているのでしょうか。「復活の主を疑ったトマス」「疑い深いトマス」——こういうふうかもしれません。けれども今日は、トマスのことをもう少し丁寧に見つめてみることにしましょう。

ヨハネ福音書第 11 章にこんな話が伝えられています。イエスが愛しておられたラザロが重い病で死に瀕しているということが伝えられました。しばらくしてイエスは「もう一度、ユダヤに行こう」と言われました。ラザロを訪ねると言われたのです。弟子たちは反対しました。なぜなら、そこはとても危険な場所だったからです。弟子たちは言いました。

「ラビ、ユダヤ人たちがついこの間もあなたを石で打ち殺そうとしたのに、またそこへ行かれるのですか」ヨハネ 11:8

しかしイエスはこう言われました。

「わたしたちの友ラザロが眠っている。しかし、わたしは彼を起こしに行く。」11:11

これを聞いたとき、トマスは感動しました。このイエスという方は、自分の命を危険にさらしてでもラザロを救おうとされるのだ。このような方だからこそ、自分はイエスを信じてここまで来たのだ。トマスは仲間の弟子たちにこう言いました。

「わたしたちも行って、一緒に死のうではないか」11:16

イエスと一緒に死んでよい。この方と一緒に死のう。彼はそう本気で思ったのです。このことだけで、トマスがどんなにイエスを愛しイエスを信頼していたかがわかります。

さて今日の福音書です。

「十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。」ヨハネ 20:24

日曜日の夕方、復活されたイエスが弟子たちのところに来られたとき、トマスはそこにいなかったのです。

「そこで、ほかの弟子たちが、『わたしたちは主を見た』と言うと、トマスは言った。『あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。』」20:25

ほかの弟子たちが主を見たというのをトマスは拒絶しました。そんなのは幻想幻覚に違いない。一時の興奮などすぐ冷めてしまう。絶対に信じない。

けれども彼の心には、同時に深い悲しみがあつたかもしれません。イエスがほんとうに復活して弟子たちのところに来られたなら、なぜ自分には出会ってくださらなかったのか。自分だけが見捨てられたような孤独。イエスを愛していたがゆえに、彼の心は苦しみました。

しかしこの後が大切です。このトマスを目指して、イエスは来られるのです。

「さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵が掛けてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた。それから、トマスに言われた。『あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。』」 20:26-27

イエスは来て、真ん中に立って、「あなたがたに平和があるように」と言われました。それは皆に言われたのですが、とりわけトマスに向かって言われたに違いありません。一番平和を必要としていたのはトマスです。

「あなたがたに、あなたに平和があるように」

自分に呼びかけるイエスの言葉が彼の心に浸透してきます。慰めと平和が彼の魂を潤します。イエスが生きておられる。わたしの所にも来てくださった。

「それから、トマスに言われた。『あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。』」 20:27

トマスは、差し出されたイエスの手を見ます。その手の傷跡を見ます。わき腹の傷跡を見ます。でももはや自分の手をイエスのわき腹に入れたりする必要はありません。ただうれし

た。イエスは確かに生きてここにおられる。トマスは両手を伸ばしてイエスを抱いたかもしれません。いやむしろ、イエスのほうが彼を抱き寄せてくださったのではないのでしょうか。

イエスはさらにトマスに言われました。

「信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」 20:27

これは信じない者を非難する言葉ではなく、愛し招く言葉です。信じたいのに信じられず、迷い苦しんできた者をイエスは招き、引き寄せられるのです。イエスはトマスと出会いトマスを引き寄せて、信じる者とされました。トマスは今や信じて、喜びに満たされます。

トマスは答えて、イエスに向かって言いました。

「わたしの主、わたしの神よ」 20:28

トマスの真心からの叫び、イエスに対する信仰告白です。

「わたしの主、わたしの神よ」

イエスはトマスに言われます。

「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」 20:29

このイエスの言葉をいかめしい命令の言葉ととらないようにしましょう。イエスはトマスに見ること禁じられたのではありませんでした。ご自身をトマスに示されました。イエスはトマスを愛しつつ諭されるのです。トマスにも、そしてわたしたち

にも言われるのです。

「わたしは復活して、たとえ見えなくても生きてあなたと共にいるのだから、心配せずに信じていなさい。わたしを信じることの幸せの中にいなさい。」

たとえ直接わたしを見なくても、わたしは生きてあなたが共にいるのだから、信じていなさい。わたしを信じることの幸せの中にいなさい。

トマスは特別の苦しみを味わいました。イエスに会えない、見捨てられたような1週間を過ごしました。孤独という言葉では表現できないほどの悲しみでした。しかしそのような悲しみと苦しみを経験したからこそ、彼に与えられる祝福があります。このような彼にしかできない働きが前に広がっています。復活の主が、ずっと彼とともにおられます。

言い伝えによれば、トマスは後に遠くインドにまで行ってイエスのことを広めたと言われます。そしてトマスを創立者と信じる「マル・トマ教会」が現在も存在し、聖公会との間に深い交流を持っています。

ところで今日の箇所から、もう一つ大切なことに触れておかなければなりません。トマスはわたしたちのために、信仰の一つの大きな扉を開いてくれたのです。何かというと、イエスに向かって彼が呼びかけた「わたしの神」という言葉です。

イエスは、まことの人であり、かつまことの神である——これがキリスト教の根本です。

イエスは「まことの人」として、わたしたちのあらゆる苦しみと悲しみを知ってください。みずから傷つき、十字架に死なれた人でした。けれどもこのイエスが、同時に**神**であるからこそ、わたしたちを完全に救うことができるのです。

わたしたちは父なる神に対して祈るとともに、イエスに向かっても祈ります。それはイエスがまことの神であるからです。イエスはわたしたちを愛し、わたしたちの祈りに耳を傾け、さらにわたしたちと共に祈ってください。

トマスは復活の主イエスを「わたしの主、わたしの神」と呼びました。わたしたちも、このイエスを「わたしの主、わたしの神」と呼びましょう。

祈ります。

復活の主イエスさま、あなたが迷い疑うトマスを愛してご自身を示し、彼に感動と喜びを与えてくださったように、わたしたちにもご自身を示して喜びを与えてください。わたしたちの不安と不信仰を癒やし、復活のいのちをもって祝福してください。アーメン